別紙 4

報告番号	※　　第　　号

主　論　文　の　要　旨

論 文 題 目　　Texting and Face-to-Face Speaking in Task-Based Language Teaching

氏　　名　　髙瀬　奈美

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、Texting（チャットやメッセージングなどによる文字でのオンラインコミュニケーション）とタスクを第二言語習得に利用した場合、その後のスピーキングテストで語彙の多様性、正確性、文法、統語、流暢性にどのような影響があるかを調べ、対面タスク活動と比較することで、モードによる違いを明らかにすることを目的として行った。

Texting の第二言語習得への有用性については一連の先行研究があり、それによると、Texting 中の自己修正は、情報が視覚的に与えられることと情報交換のペースがゆるやかであることから、第二言語習得の効率が向上することが示唆された（Sauro & Smith, 2010）。一方、Texting を利用した言語学習がその後のスピーキングテストにどう影響するのかについては、いまだ明らかになっていない。そこで本研究では、Texting 行為の自己修正活動がその後のスピーキングの統語的複雑性、文法の正確性及び語彙の多様性の向上に影響するか否かを分析した。

Texting とスピーキングの関係を解明するための重要な要因は、タスクの実施条件と種類である。Skehan(2014) によると、タスクの実施条件にはタスクの回数と時間があり、産出言語を左右するとしている。また、タスクの種類も産出言語に影響することから、異なる研究結果を比較する際は注意が必要という指摘もある。そこで本研究では、実験協力者となる学習者の外国語学習の習熟度を考慮してタスクの種類を決定し、後述の三つのタスク実施条件を設定し、対面タスク活動と Texting を利用したタスク活動を行い、その後のスピーキングテストへの影響を分析した。

本研究の対象を CEFR　A1-B1 に限定した上で、仮実験として３種類のタスク（Interview, Narration, Decision-making）を Texting を利用して行った。そのうち、Interview タスクを本実験で利用することにした。

実験１においては、タスクを繰り返す回数を一定にし、事前事後に１分間のスピーキングテストを行った。また、対面群と Texting 群を作り、対面群にはインタビューを行い、Texting 群にはオンライン上で Texting を利用したインタビュータスクを行った。そして、それを３回繰り返し、テストの変化を分析した。

その結果、Texting 群では、語彙のエラー率が内容語と機能語の両方で下がり、統語的複雑性の文構造スコアが向上した。また、Texting 群の事後テストでは母語の使用、繰り返し、省略が減少した。Texting 群のみが語彙の正確性が向上した理由は、タスクに従事した時間が対面群の約３倍と多かったためと推測できる。そこで、次の実験２では時間を一定にして同じ実験を行った。

実験２では、タスクに従事する時間を一定にして実験１と同様の実験を行った。その結果、Texting 群の内容語でのみ語彙のエラー率が改善した。すなわち、Texting 群の事後テストにおいて、正確な語彙の選択、繰り返しについて改善が見られた。特にタスク中の発話において、Texting 群では繰り返しや母語使用がなかった。これは、Texting では視覚的に産出言語を確認できることから、送信前に間違いに気付き、修正できたためと考えられる。また、対面群は発話速度が事前テストに比べて、向上した。

実験３では、新出熟語の習得の可能性を検証すべく、２群とも毎回五つの新出熟語の習得を目指した。一つは新出熟語が含まれた質問文を利用したインタビュータスクであり、もう一つは新出熟語を反復するタスクである。両方のタスクを１週間１セット行い、３週間続けた。対面群は全て口頭で行い、Texting 群は Texting を利用したインタビュータスクとタイピングを利用した反復練習で行った。そして、事前事後テストと空所補充問題を使用して新出熟語の定着を測定した。

その結果、空所補充問題の結果に差はなく、両方とも高い習得率を示した。事後テストでは、Texting 群で語彙のエラー率が内容語と機能語の両方において減少し、統語的複雑性スコアと発話速度が向上した。一方の対面群では、発話速度と調音速度が向上した。調音速度は、分かりやすさにつながる指標とされているが、これは Texting では向上しなかった。

本研究では、一定の条件下で Texting を利用した場合、その後のスピーキングにおいて、語彙の正確性、統語的複雑性、発話速度に影響することが明らかになった。一方、同じタスクを対面で行った場合は、十分な時間が確保された場合のみ発話速度と調音速度の両方が向上した。

Texting 群では、視覚的な情報が利用できることや情報交換がゆるやかであることから語彙の繰り返しや母語使用などのエラーが減少し、その後のスピーキングテストで語彙の正確性が向上し、統語的複雑性への効果も生じたものと考えられる。つまり、CEFR A1-B1 の初級外国語学習者は、Texting を利用することによって語彙使用の誤りに気付き、修正し、その後のスピーキングに好影響をもたらすことが明らかになった。

一方、対面では、流暢性指標である発話速度と調音速度の両方の向上が確認できた。これは、Texting 練習では得られなかった効果である。Texting を利用した第二言語習得の学習方法は語彙の正確性や統語的複雑性を向上させ、産出言語の形式に注意を向けるようになることが明らかになった。しかしながら、Texting は発話をしないことから調音速度に効果はなく、異なるモードが与える言語学習効果の違いが判明した。